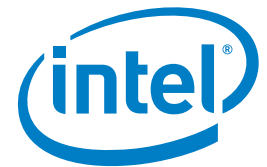


導入事例

Ultrabook™ デバイス

Ultrabook™ とインテル® アイデンティティ・プロテクション・テクノロジーによる
ワンタイムパスワードの導入



一刻一秒を争う夕刊紙の写真入稿に Ultrabook™ の軽さと速さと高いパフォーマンスが貢献

クラウド型ファイル共有サービス「BAZA ONLINE」のセキュリティーを強化



株式会社日刊現代

本社: 東京都中央区築地 3-5-4
中川築地ビル
設立: 1975年9月
事業内容: 日刊ゲンダイの発行
<http://gendai.net/>

課題

- 軽さ、速さ、高性能を満たしたノートブック PC に対するニーズ
- ノートブック PC のセキュリティー・レベルの強化
- クラウド型ファイル共有サービス利用時の認証強化

ソリューション

- Ultrabook™ デバイス
- エンタープライズ向けクラウド型ファイル共有サービス「BAZA ONLINE」
(株式会社ウェイズジャパン)
- クラウド型セキュリティー・サービス「Symantec* Validation & ID Protection」
(日本ベリサイン株式会社)

導入効果

- モビリティの促進
- ユーザーの利便性向上
- 従来の固定パスワードとワンタイムパスワードの2要素認証によるセキュリティー強化
- 最新情報を掲載する夕刊紙の紙面作りへの貢献

1日に2回の締め切りで 当日に起きたホットニュースを 夕刊紙の1面に掲載

首都圏のJR、地下鉄、コンビニ売りのタブロイド判夕刊紙「日刊ゲンダイ」の発行を手がける株式会社日刊現代(以下、日刊現代)。1975年(昭和50年)の設立以来、「日刊ゲンダイ」の紙面を通して、政治、経済、スポーツ、芸能、娯楽など、硬軟取り混ぜた話題を提供してきました。発行地域は、東京・大阪・名古屋の3大都市とその周辺に、札幌、東北主要都市部を加えた5エリアで、発行部数は国内の夕刊紙でもトップクラスを誇ります。編集ポリシーは、中立的な立場で批判すべきはきちんと批判する姿勢を堅持。創刊から40年近くにわたり、数々のスクープ記事を連発してきました。ニュース面では、国内外を左右する大事件や、ビジネスマンが高い関心を寄せるニュースを積極的に取り上げ、読者の視点に立った紙面作りを徹底。娯楽面では、スポーツ面の充実が著しく、週末開催の競馬予想はもちろん、プロ野球、大

リーグ、サッカー、ゴルフなどに注力しながら、男性を中心とする読者のニーズに応えています。

「日刊ゲンダイ」の紙面は、1面から続くニュース記事、最終面から続くスポーツ記事と中面記事で構成され、中面は娯楽性の高い話題や企画記事、識者によるコラム、小説、漫画など多彩な編集記事で埋められています。一方、店頭で最も目を引く1面記事は、その日に起きた政治やスポーツのニュースを速報として掲載する「日刊ゲンダイ」の生命線です。情報の鮮度にこだわった1面から5面まで続くニュース面作りを目指す編集局は、朝の9時30分と昼の12時30分の2回の締め切りを設け、各面の記事を差し替えながら常にホットな情報を届けています。9時30分の締め切りで作成するニュース面は、前日の夕方から当日の朝までに起きた事件や政治動向を、最終面とスポーツ面ではオリンピックやサッカーW杯、世界選手権など関心度の高いスポーツ、時差のあるメジャーリーグやゴルフなどの情報が中心。

ワンタイムパスワードを自動生成する インテル® IPT を組み込んだ Ultrabook™



「記者会見会場やスタジアムなど、
過酷な状況で利用するPCだからこそ、
機動力が求められます。

その点、Ultrabook™の軽さは
申し分なく、休止状態からの復帰も
スピーディーで、現場での
レタッチソフトの作業にも耐える
パフォーマンスを維持しています。

Ultrabook™は、
最新の写真を紙面で届ける
日刊ゲンダイに欠かせない
存在となりました」

株式会社日刊現代
編集局 写真部
部長
高野 宏治 氏



日刊現代が導入したデル社の Ultrabook™



カメラマンの取材用機材と Ultrabook™

12時30分の締め切りで作成するニュース、スポーツ各面は、その日の午前中に起きた政治ニュース、重大事件、高校野球の速報などを臨機応変に対応しています。さらに12時30分以降に起きたビッグニュースについては、特別制作体制を敷き、首都圏の一部エリアを限定とした特別版を発行するケースもあるといいます。編集局 写真部 部長の高野宏治氏は「ライバル紙にはない最新のニュースを、その日の夕方に届けることが、夕刊紙でトップを走る日刊ゲンダイのバリューです。そのため、記事はもちろん写真もスピードが最優先です」と説明します。

デジタル写真の入稿用のサーバーに クラウド型ファイル共有サービスを利用

1日2回の締め切りに合わせて最新のニュースを届けるために、編集局の写真部では、カメラマンに1人1台ノートブックPCを配布。撮影したデジタル写真を、撮影現場から入稿用のサーバーに直接アップロードする体制をとっています。カメラマンは、記者会見会場や政党の事務所、スタジアムなどで撮影した取材写真をその場でカードリーダーを使ってノートブックPCに転送。PCではレタッチソフトを起動し、写真のトリミングや明るさ補正など、簡単な修正加工を行ったうえで、無線LANやモバイル・ネットワーク経由で写真を本社に送信します。

写真入稿用のサーバーには、株式会社ウェイズジャパンが提供するエンタープライズ向けクラウド型ファイル共有サービス「BAZA ONLINE (バザオンライン)」を利用。カメラマンが取材現場からBAZA ONLINEにアップロードした写真は、社内常駐の編集担当者が即座にレイアウトして紙面を構成。その後、入稿作業、印刷工程を経て、その日の夕方には駅やコンビニの店頭で紙面が並ぶ段取りです。日刊現代が写真入稿用でBAZA ONLINEの利用を開始したのは2001年ごろでした。当初は写真のアップロード専用で、入稿済みの写真を外部から見ることはできなかったといいます。そこで2006年にBAZA ONLINEがクラウドに移行するのに伴い、ファイル共有の用途として利用を開始。ノートブックPCなどからサーバーに保存した写真や入稿写真の閲覧や編集ができるようになりました。現在は、写真入稿用の用途以外にも、出張先のホテルや現場からノートブックPCで

サーバーにアクセスし、別のカメラマンが撮影した写真や、過去の入稿写真などを参考に、写真の構図作りに活用しています。

「例えば、プロ野球のナイター写真を撮影する場合、共有サーバーにアクセスして他球場のカメラマンが撮影した写真を確認して、構図がかぶらないように始めにカメラマン自身が写真を選択することが可能です。3連戦の場合には前日送信した写真が掲載された紙面を参考に、前日とは違った雰囲気の写真を撮るといった用途にも利用しています」(高野氏)。

また、撮影以外の時間には、共有サーバーに保存してある過去の入稿写真に付けたキャプション(説明文)を、後から検索しやすいように、撮影状況やシチュエーションなどを詳しく書き加えるといった作業を定期的に行っているといいます。

軽さ、持ち歩きやすさ、起動の速さ パフォーマンスを評価して Ultrabook™を採用

日刊現代では、取材現場から写真を送信する場合、撮影した写真加工や、写真の入稿作業を今まではノートブックPCを利用してきました。しかし、年々重量が増えていくカメラや、周辺機材と一緒に毎日持ち歩いて使うことを考えると、機動力に優れた小型軽量のPCが必須です。そこで写真部は、既存PCのリース切れを機に新たなノートブックPCを検討し、13型液晶を搭載したデル社のUltrabook™を選定しました。選定の理由を高野氏は、「軽さ、持ち歩きやすさ、起動の速さ、パフォーマンスなどカメラマンが必要とする機能をすべて網羅していたことがポイントです」と評価します。

Ultrabook™は、インテルが提唱する薄型・軽量のノートブックPCで、第2世代以降のインテル® Core™ プロセッサ・ファミリーを搭載し、厚さは液晶サイズ14型未満が18mm以下(14型以上は21mm以下)、バッテリー駆動時間は5時間以上(8時間以上奨励)、休止状態(ハイバネーション)からの復帰は7秒以内などと細かく規定されています。

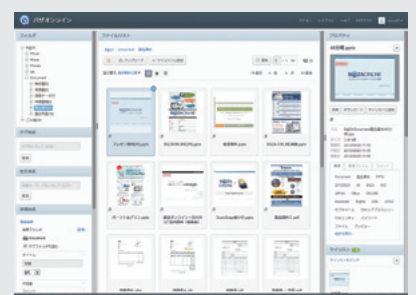
過酷な状況に置かれることが多い撮影現場では、機動力もさることながら、休止状態か

エンタープライズ向け
クラウドファイル共有サービス
「BAZA ONLINE」
(株式会社ウェイズジャパン)

<http://www.baza.jp/>

BAZA ONLINE は、文書、写真、画像、動画などのさまざまなファイルを複数のユーザーで共有するためのクラウドサービスです。「相互利用」を特長とし、サーバー上のデータは、アップロードしたユーザーに関係なく、誰でも、いつでも、どこからでも利用できます。アップロードされたファイルに対しては中身を自動解析し、メタ情報を自動的に付加して保存します。そのため、大量のファイルが保存されている場合でも、目的にあったキーワードで検索して探し出すことも簡単。ファイルの関連付けも自動的に行なわれているため、通常では気付かないファイルが見つかる確率も高くなります。

ファイルのアップロードも簡単で、ドラッグ&ドロップのほか、添付メールによる自動アップロード、スキャナーなどの外部機器との連携登録もできます。また、アクセス権ほか、各種アクション制御や、ファイルロックなどに対応。詳細なログ解析機能も備えているので、法人向けの監査にも有効です。大手新聞社、出版社、テレビ局を中心としたメディア企業を筆頭に、医療機関、一般企業、政府観光局などに導入実績があり、セキュリティーを重視する企業に多く採用されています。



BAZA ONLINE のファイルリスト画面



BAZA ONLINE は、タブレットやスマートフォンにも対応

ら7秒以内で復帰するスピードが欠かせません。Ultrabook™なら撮影現場を移動する際に休止状態に落としても、スイッチひとつで素早く稼働状態まで復帰できます。また、撮影した写真のピントを確認したり、レタッチソフトで加工したりすることから、液晶の画面はある程度のサイズが必要で、さらにPCのパフォーマンスに関しても妥協は許されません。

「その点、インテル® Core™ プロセッサ・ファミリーを搭載した Ultrabook™なら、レタッチソフトの操作でもストレスを感じることもなく、サクサクと操作できます。締め切り時間のギリギリまで撮影を続けるカメラマンにとって、起動や処理のスピードの速い Ultrabook™は、まさにニーズに合ったデバイスでした」(高野氏)。

**Ultrabook™が内蔵する
インテル® アイデンティティ・プロテクション・
テクノロジーにより
クラウド型ファイル共有サービスの
強固な2要素認証を
従来の使い勝手のまま実現**

日刊現代が、Ultrabook™を採用したもうひとつの理由が、ファイル共有サービス「BAZA ONLINE」利用時のセキュリティー・レベルの向上です。政治や芸能ネタを扱うマスコミの特性上、個人情報や閲覧不可の素材を扱うケースも少なくないことから、写真や入稿データの流出は、重大なインシデントを招きかねません。従来環境で BAZA ONLINE を利用する際は、ユーザー ID とパスワードを利用してログインしていましたが、より強固な認証手段を検討した結果、BAZA ONLINE が提供するワンタイムパスワード・オプションの導入を決定いたしました。

通常、認証レベルを高めるためには、ワンタイムパスワードによる2要素認証を採用するケースが一般的で、ハードウェア・タイプのトークンを購入するか、ソフトウェア・タイプのトークンをPCにインストールするケースがほとんどです。しかし、ハードウェア・トークンは導入コストがかかるほか、紛失、盗難、落として踏みつける、誤って洗濯するといった故障のリスクも高く、管理の手間もかかります。そのため、ビジネスの現場に則しているとはいえません。一方のPCにインストールするソフトウェア・トークンは、導入が簡単で使い勝手

に優れる反面、PCのHDDやSSD自体をコピーされてしまえば、情報の流出を抑えることは困難です。

Ultrabook™は、ハードウェア・トークンとソフトウェア・トークンの欠点を解消する、インテル® アイデンティティ・プロテクション・テクノロジー (インテル® IPT)¹ と呼ぶワンタイムパスワード生成ツールを実装しています。インテル® IPT を利用すると、チップセット上でワンタイムパスワードを自動生成します。また、ワンタイムパスワードは30秒ごとに自動で更新されるため、第三者による不正アクセスは極めて困難になります。

インテル® IPT は、従来のハードウェア・トークンの機能を、第2世代のインテル® Core™ プロセッサ・ファミリー以降のチップセットに直接組み込んだもので、ハードウェア・トークンのような紛失や盗難といったリスクもありません。仮にPCが盗難にあったとしても、OSレイヤーの下で動作するインテル® IPT なら、HDDやSSD自体を丸ごとコピーして情報を取り出すことは不可能です。

一方、BAZA ONLINE では2012年06月、日本ベリサイン株式会社 (以下、ベリサイン) が提供するワンタイムパスワード認証「Symantec* Validation & ID Protection」を採用し、セキュリティー体制を強化しました。これにより、従来のユーザー ID とパスワードに、随時更新されるワンタイムパスワードを加えることで、不正アクセスのリスクを一気に縮小することができます。BAZA ONLINE が提供するベリサインのワンタイムパスワード・ソリューションは、インテル® IPT との連動が可能であることから、Ultrabook™を導入するだけで、通常のパASSWORDとワンタイムパスワードによる2要素認証が実現します。

**軽さとパフォーマンスを兼ね備えた
Ultrabook™により
写真入稿のスピードが大幅に向上**

Ultrabook™を導入した結果、写真部のカメラマンの機動力と、ファイル共有のセキュリティー・レベルは大幅に向上しました。実際の使用感について高野氏は、「撮影現場では、PCで作業するスペースはほとんど無い場合が多く、今まではスペースの確保に苦心していました。しかし、軽くて薄い Ultrabook™な

ら、左手に乗せたままでも余裕で作業ができるので、作業性は確実に高まっています。休止時間からの復旧もスピーディーで、移動撮影時の作業効率も向上しました」と語ります。

過酷な撮影環境に置かれるカメラマンにとって特に有益だったのが SSD の採用によって衝撃に強くなったことです。撮影現場で急を要する場合は、電源を入れ PC を地面に立てかけて撮影を続行するケースもあり、一般のオフィスでは想像もつかない過酷な状況に置かれることも何度かあったといいます。SSD ならディスクが回転する HDD と比べて耐性も高く、さまざまな撮影環境での対応が可能となります。

パフォーマンスについても、レタッチソフトでのトリミングや画像補正作業は快適にこなせると言います。「送信前のトリミングや補正作業は、速報時においてはデータサイズを少しでも小さくして、本社に一刻も早く写真を送るためのものです。この作業で時間がかかるとかかからないかで、締め切り直前の撮影にも大きな影響を及ぼすことになるため、高いパフォーマンスが維持できたことは大きな効果



日夜、最新ニュースを発行している「日刊ゲンダイ」編集局

です。また、バッテリーの持続時間も 5 時間以上と、2 時間から 3 時間かかるプロ野球やサッカーの試合、政治関係の記者会見でも省電力モードにすることなく余裕で持続できるようにになりました」（高野氏）。

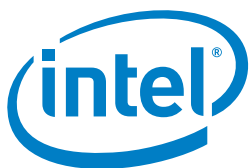
これまでの固定パスワードにワンタイムパスワードを加えた 2 要素認証によって BAZA ONLINE 利用時のセキュリティーも強化されています。日刊現代の場合、ワンタイムパスワードは、システムが自動入力する設定にしておき、BAZA ONLINE による入稿時は以前と同様、ユーザー ID とパスワードの 2 つ

を入力するだけで、新たな負担は生じていません。現場で忙しいカメラマンにとっては、意識することなくセキュリティー・レベルが向上していることが重要であることから、インテル® IPT が果たしている役割は決して小さくありません。

日刊現代では現在、写真部で Ultrabook™ の導入を開始し、既に第一線の現場で活動するカメラマンに多大なメリットをもたらしています。高野氏は今後の予定について、「まだ利用していないカメラマンの PC も順次 Ultrabook™ に切り替え、写真部全体への導入を進めていきます。そのためにも引き続き、軽さと強さを両立した Ultrabook™ の開発に期待しています」と語りました。

高いパフォーマンスとセキュリティー機能を備えた Ultrabook™ は、ハードな撮影に挑む日刊現代の写真部に欠かせない存在となつつあるようです。インテルでは、今後も性能強化、機能強化を続け、お客様のニーズに添えていきます。

Ultrabook™ に関する詳しい情報は、下記のサイトをご覧ください。
<http://www.intel.co.jp/ultrabook/business/>



株式会社日刊現代
編集局 写真部
部長
高野 宏治 氏

¹ すべての条件下で絶対的なセキュリティーを提供できるシステムはありません。インテル® アイデンティティー・プロテクション・テクノロジー (インテル® IPT) を利用するには、インテル® IPT に対応した第 2 世代または第 3 世代インテル® Core™ プロセッサ・ファミリーを搭載したシステム、および同テクノロジーに対応したチップセット、ファームウェア、ソフトウェア、インテル® IPT に対応した Web サイトが必要です。インテル® IPT に対応した Web サイトでのみ利用可能です。各システムメーカーにお問い合わせください。データやシステムの紛失や盗難など、サービス利用の結果生じたいかなる損害に対してもインテルは責任を負いません。詳細については、<http://ipt.intel.com/welcome.aspx> (英語) を参照してください。

本書は参考用です。インテルは、明示されているか否かにかかわらず、本書の内容に対する保証はしていません。

具体的なコスト削減額や結果は、当該顧客企業、そのビジネス目標や企業環境の構成に特有のもので、ビジネス目標、ソフトウェア設計、インフラストラクチャー、または構成が異なると、実際の結果にも差が生じます。

Intel、インテル、Intel ロゴ、Intel Core、Core Inside、Ultrabook は、アメリカ合衆国および/またはその他の国における Intel Corporation の商標です。

* その他の社名、製品名などは、一般に各社の表示、商標または登録商標です。

インテル株式会社

〒100-0005 東京都千代田区丸の内 3-1-1
<http://www.intel.co.jp/>

©2012 Intel Corporation. 無断での引用、転載を禁じます。
2012 年 10 月

328059-001JA
JPN/1210/PDF/SE/MKTG/TS